

県立広島大学・ひろしま美術館連携公開講座「近代日本の異文化体験」を開催しました(講座概要)

平成18年7月22日(土)・29日(土)・8月5日(土)の3日間にわたり、県立広島大学・ひろしま美術館連携公開講座「近代日本の異文化体験」を、ひろしま美術館講堂で開催しました。この講座では、近代日本に導入された西洋文化の受容の過程を人文学と芸術の両面から探ることを目的として、大学教員と美術館学芸員が1日に2講座、講義を行いました。講座の内容を次のとおり、ご紹介します。



「夏目漱石と英文学」 人間文化学部 高橋 渡教授

高橋教授は、西欧文化の受容という観点から、漱石とその文学について話しました。

漱石が生きた明治は、欧化政策(文明開化)によって社会構造や価値観が大きく変わり、個々人の利益によって動く競争社会の時代でした。社会に共通する価値観や人間関係が失われ、利己主義と孤立の時代だったのです。

漱石はそのような時代や英文学の異質性に対する不安から、文学とは何かという概念を確立しようとしています。漱石

の文学は「『私』とは何か」を一貫した主題としていますが、この講義では、作品の引用を通して、自我の内部に閉ざされた絶対的な孤独から自我の相対化への過程を考察しました。

また、漱石がヨーロッパの知的潮流を察知し、時代に先立って自我の問題を認識したことを、20世紀イギリスのモダニズム文学との関連で解説しました。

漱石は西洋の受け売りを拒否しつつも、文学、心理学、哲学、科学など、西洋文明の根幹を最もよく理解していた知識人でした。異文化から学ぼうとするとき、自国文化の優位性を強調するのではなく、相手文化の根底にある思想を知ろうと努力することなしには何も学び得ないことを、漱石は教えてくれています。



「日本における美術館の受容とひろしま美術館」 ひろしま美術館 水木祥子学芸員

水木学芸員は、欧米の美術館の歴史を辿り、美術館が近代日本でどのように受容されていったかをお話ししてくださいました。

ヨーロッパでは、古代から一部の特権階級が権力を誇示するために「収集保存」を行ってきました。それらのコレクションが広く一般に公開されるようになったのは、1793年のルーヴル美術館の誕生に始まります。そこでは、フランス革命によって没収された王室コレクションが公開さ

れ、美術館は「民主シーの象徴」とされました。一方、歴史が浅いアメリカでは、当初から市民教育の目的で美術館作りが行われ、市民による寄贈や寄付で拡大充実が図られてきました。

日本では、寺社や権力者たちが収集保存を行ってきましたが、近代的な意味での美術館が出来たのは、明治期のことです。国が主導し、殖産興業を推進するための啓蒙教育の施設として作られたのが日本の特徴です。戦後は美術館建設ラッシュが起こり、現在では日本中に美術館があります



が、厳しい財政状況の中で、新しい美術館のあり方が様々な形で模索されています。

このような流れの中で、ひろしま美術館の特徴(地域に根ざしたアメリカ型の運営, 親しみやすい印象派を中心としたコレクション, 常設を中心とした展示(欧米型)順路のない円形展示室など)が説明されました。

「近代日本の教育と庄原英学校」 生命環境学部 馬本 勉助教授

馬本助教授は、明治期の日本が西洋の言語・文化の受容をどう試みたかを、庄原英学校の教育を通して話しました。

庄原英学校は「県北で初めての近代学校」とも言われています。明治17年に設立され、英学、数学、漢学を講じていました。「英学」とは英語を通じて行われた学問の総称で、語学・文学だけでなく、地理、歴史、経済、地質学、天文学なども英書を用いて教え、日本の近代化に大きな役割を担っていました。



この講義では近代日本の教育史、その中で庄原英学校の位置づけと果たした役割、教科内容と英語教育について解説が行われました。当時の英語教科書の一つ「ニュー・ナショナル・リーダーズ」はアメリカから輸入されたもので、段階を追った教材配列で英語の総合的な運用能力を高めることを目的としており、また、若者にとっては「外国を知る窓」となっていました。講義の中では、当時使われていた英語教科書や、庄原出身の森修一氏の書いた独習書「ニューナショナルリールドル独案内」を閲覧し、受講者の皆さんの興味を引いていました。

当時の教育からは、異文化の摂取と受容の精神、媒体としての英語の研究・学習など、現代でも学ぶべきものがあります。

「日本におけるゴッホ受容」 ひろしま美術館 古谷可由学芸員

古谷学芸員は、ゴッホが近代日本にどのように受容されていったかを、ヨーロッパの動向とも比較しながら、年表や作品を通してお話してくださいました。

ゴッホは1890年に37歳で亡くなりますが、存命中は、ほとんど絵が売れませんでした。ヨーロッパでは1900年からの10年間で評価が高まり、その後は人間的側面が強調されていきます。



日本では1910年に雑誌『白樺』で紹介され、若い世代を中心に一気に広まりました。ヨーロッパと比べても早い時期での導入だったと言えます。ゴッホは文芸誌で取り上げられたほか、岸田劉生を中心とした「フェウザン会」でも、影響を受けた作品が多く出品されました。

ゴッホの作品はオリジナルではなく図版(複製画)で紹介され、絵画様式よりもその人生がクローズアップされ、文学や演劇の題材となっていきます。

現在、日本の美術館で見ることができるゴッホのオリジナル作品は16点到りません。ひろしま美術館が所蔵している「ドービニーの庭」は亡くなる2週間前に描かれたものです。バブル最盛期に他の作品が購入されるまで、国内では唯一、ゴッホらしさがうかがえる作品でした。

「倉田百三の精神世界～『出家とその弟子』再読～」 人間文化学部 坂根俊英教授

坂根教授は倉田百三の作品にみられるエロスとアガペーの相克を、同時代の文学者とも比較しながら話しました。

倉田百三はさまざまな精神的な戦いの生涯を送った人



です。彼は多くの恋愛を体験し、エゴイズムに陥りやすい

エロスの愛に悩み、隣人愛や人類愛であるアガペーの愛を求めますが、芸術や美に惹かれる心も広い意味でのエロスの愛に属するものですから、エロスとアガペーの対立と相克は、百三の生涯を貫く戦いとなりました。

『出家とその弟子』では、唯円とか(・)へ(・)で(・)の恋を通して信仰と恋愛の対立、求道性と人間性との戦いが、善鸞(ぜんらん)と人妻の恋によって恋愛と道徳の対立矛盾が描かれています。一方、生まれ変わり思想や、罪が赦される「慈悲」の中に、他者に対する思いやりや優しさ、神の愛、隣人愛などが表現されています。

『出家とその弟子』は親鸞(しんらん)を歪曲している、キリスト教思想が多い、弱くて甘いセンチメンタリズムが流れている等の批判がありましたが、ヨーロッパではロマン・ロランによって西洋と東洋の精神が調和していると絶賛され、日本でも親鸞ブームの契機を作りました。百三はこの作品で人間の心の姿を描き、争いや弱肉強食の不調和な世界を、究極的には神が創った調和的な世界としてとらえようとした。

「大正期の画家たちと“りんご”」 ひろしま美術館 渡辺純子主任学芸員

渡辺主任学芸員は、りんごが近代日本の洋画にどのように取り入れられ、広がっていったかを、絵画史をひもときながらお話しくださいました。物はモチーフとして台上に置かれた時に「静物」となります。静物表現は古代ギリシャ・ローマにさかのぼります。長い間、背景としてしか扱われなかった静物が独立したジャンルになるのは16世紀末から17世紀にかけてのことで、特に17世紀オランダで黄金期を迎え、偶像を廃したプロテスタント信仰のもとで、宗教的な寓意として描かれました。その後、18世紀のフランスでは宗教性や道徳性が希薄になり、静物は視覚的効果を追求するモチーフとして扱われるようになります。



りんごを静物画の主角としたのはセザンヌでした。りんごは単純な形や色の多彩さから、モチーフとしてすぐれた素材ですが、セザンヌにとってはゾラとの親交を象徴する果物でもありました。また、セザンヌはりんごが腐敗していくまでアトリエにおいていたといわれます。彼のりんごには、同じセザンヌが繰り返し描いた髑髏(どくろ)と同様の、「人は死すべきもの」という伝統的な意味をも含んでいたと考えられます。

日本では大正期に、岸田劉生によってりんごの静物画が広まりました。『白樺』などを通じて、セザンヌの静物画が紹介されていたことも大きく影響しましたが、物の奥深くに潜む真実の美をまるで祈るような思いで描き出そうとした岸田劉生の影響力は、多くの若い画家たちを惹きつけました。傷や虫食いの痕、朽ちていく過程をそのまま描く彼らのりんごには、セザンヌのりんご、さらには髑髏と同様の象徴性を帯びているようです。

りんごのモチーフとその意味は、様々なかたちで現代の作家たちにも受け継がれています。

美術館との連携講座という、これまでほとんど例のなかった試みは多くの方々のご支持をいただきました。大学では、今後も地域の生涯学習施設などと連携しながら、地域文化の活性化のために尽力していきたいと思っております。